

補文関係複合動詞の自他交替について¹

史 曼

要 旨

補文関係複合動詞 [V1-V2] は通常、V1の統語的素性を受け継ぐため、V2の自他性は複合動詞に影響を与えないとされてきた(影山1993, 由本2005)。しかし、「(~を)編み上げる-(~が)編み上がる」のように、V2の自他性によって複合動詞全体の自他性が変わる例もある。本稿ではこの現象を自他交替という観点から考察し、補文関係複合動詞の自他交替の現象を語彙概念構造(LCS)に基づいて説明する。結論として、「編み上げる」のような補文関係複合動詞では、V1は事象内容を表し、V2はアスペクトを表すと同時にV1のLCSを構成する事象の1つを焦点化する。このような状況において、V1が起因事象と結果事象からなる複合事象を持ち、V2がV1の結果事象を焦点化することによって、結果事象が焦点化される場合に自他交替が成立することを主張する。

【キーワード： 補文関係複合動詞／自他交替／LCS／アスペクト／結果事象の焦点化】

1 はじめに

本稿は補文関係複合動詞の自他交替を究明することを目的とする。補文関係複合動詞とは(1)のように、V2がV1を補文として取り、V1にアスペクトなどの意味を加えているものである。

(1) 歌い上げる：「歌うこと」を上げる(完了)

見逃す：「見ること」を逃す(未遂)

由本(2005:153)は補文関係複合動詞が意味構造レベルで形成され、V2の補部の一つがV1の意味構造によって満たされており、V1の統語的特性がそっくり複合語に受け継がれると述べている。例えば、(2)のように、V1の自他性が複合動詞全体に受け継がれている。

(2) a. 他動詞 + 他動詞 → 他動詞：見合わせる、考え合わせる

b. 自動詞 + 他動詞 → 自動詞：乗り合わせる、居合わせる、なりきる

このように、補文関係複合動詞は通常、V2の自他性が複合動詞全体に受け継がれていない。しかし、少数ながら、(3)のように、V2の自他性によって複合動詞全体の自他性が変わる例もある。

(3) (~を)編み上げる - (~が)編み上がる

- (～を) 炊き上げる - (～が) 炊き上がる
 (～を) 煮詰める - (～が) 煮詰まる
 (～を) 売り切る - (～が) 売り切れる

では、なぜ(3)の補文関係複合動詞の自他性はV2によって決まるのであろうか。本稿はこの現象を自他交替という観点から考察し、補文関係複合動詞の自他交替のメカニズムを究明したい。補文関係複合動詞の自他交替現象について、これまでに陳(2010)、影山(2013)の研究がある。陳(2010)は「編み上げる／編み上がる」、「織り上げる／織り上がる」のような自他交替できる補文関係複合動詞を、「勤め上げる／*勤め上がる」、「歌い上げる／*歌い上がる」のような自他交替が成立しない補文関係複合動詞と対照して考察し、自他交替の要因を「結果一致性」によって説明している。陳によると、「編み上げる／編み上がる」では、「編む」は作成動詞であり、[MADE]という結果を持っている。一方、「上げる」は「完了」というアスペクトを表すが、その「完了」の意味は作成の意味からの拡張であるため、「編む」と同じような[MADE]という結果を持っている。これに対して、「勤め上げる／*勤め上がる」では、「勤める」と「上げる」の結果が一致していない。これによって、陳はV1とV2の結果の意味が一致する場合、補文関係複合動詞に自他交替の可能性があるとした。陳(2010)はV1とV2の意味関係に注目し、「結果一致」からの説明は非常に示唆的である。しかし、陳の「結果一致の仮説」はV1とV2の結果意味の一致性を大いに重視する仮説であるが、「結果一致」の認定には問題があるように思われる。例えば、補文関係複合動詞「作成動詞+上げる」について、陳はV1「作成動詞」と「上げる」の結果が一致していると論じている。しかし、「セーターを編み上げる」という例を挙げると、「編む」の結果は「セーター」であるが、「上げる」は「完了」というアスペクトを表し、結果が含まれているとは言えない。このように、実質的な意味を持つV1とアスペクトを表すV2の「結果」が一致しているとは言えないであろう。そして、この仮説をはかの補文関係複合動詞に適用できるかどうかとも問題である。例えば補文関係複合動詞「煮詰める-煮詰まる」も自他交替するが、「詰める」は「煮る」と同じ結果を持っているとは考えにくい。このように、陳(2010)は補文関係複合動詞の自他交替の要因を明らかにしたと言ふことはできない。

影山(2013)も「～上げる／～上がる」について、「パンを焼き上げる／パンが焼き上がる」のように、自動詞の主語として現れる名詞が完了した事象の直接の結果として何らかの産物であると指摘しているが、理論的な分析はなされていない。

陳(2010)、影山(2013)の補文関係複合動詞の自他交替が「結果」と関わっているという考えは示唆に富んでいるが、自他交替の要因はまだ究明されていない。そして、陳(2010)も影山(2013)も「完了」を表す「～上げる／～上がる」のみについて分析しているが、ほかの補文関係複合動詞については詳しく論じていない。

そこで、本稿は補文関係複合動詞の自他交替現象を解明することを目標として、「動詞の意味がその統語的ふるまいを決定する」という語彙意味論の基本的な考え(小野2000: 3)に従って、補

文関係複合動詞自他交替の要因を語彙概念構造² (lexical conceptual structure, LCS) に基づいて探っていく。補文関係複合動詞全体の LCS を考察した上で、どういう LCS を持つ補文関係複合動詞が自他交替できるのかを分析する。

以下、まず、2 節で単純動詞の自他交替について論じ、自他交替のメカニズムを明らかにした後、続く 3 節で補文関係複合動詞の意味的特徴と統語的特徴を考察した上で、その LCS を提示する。4 節で本稿の中心である補文関係複合動詞の自他交替について詳しく分析する。最後に 5 節では、主な論点をまとめ、今後の課題を述べる。

2 自他交替について

本節ではまず自他交替とはどういうことかについて見てみよう。自他交替とは、「木を倒した／木が倒れた」、「ガラスを壊した／ガラスが壊れた」のように、他動詞と自動詞が形態的にも、統語的にも、意味的にも対応している現象である。先行研究で、一般に広く受け入れられている自他交替する動詞の LCS は次のようなものである。

(4) 自他交替する動詞の LCS :

他動詞 : [[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT<STATE>]]

起因事象

結果事象

自動詞 : [y BECOME BE AT<STATE>] 結果事象

自他交替する他動詞は、使役主(x)が対象物(y)に働きかけ(起因事象)、そのことによって対象物(y)が結果状態<STATE>に至る変化を引き起こす(結果事象)。自動詞は対象物(y)が変化することを表す。このように、起因事象と結果事象という複合事象を持つ他動詞と、結果事象を持つ自動詞が交替する。自他交替関係にある他動詞と自動詞は同一の出来事の異なる側面を叙述している。本稿では自他交替を他動詞からの自動詞化と捉え、他動詞はどのような要因によって自動詞化できるのかを見る。これについて、先行研究では、他動詞は「起因事象+結果事象」という複合事象を持つ動詞であり、起因事象が無指定(-specified)であれば自他交替が可能となり得る(Levin and Rappaport Hovav 1995) という想定からの説明が広く受け入れられている。例えば、[break] という他動詞は(5 a)のように、その主語は人間、自然力、出来事、物など広汎に選択できることから、起因事象が特定されていない、すなわち、無指定であると言えるが、この「無指定」をさらに拡張して、起因事象を完全に背景化して消してしまうと、自他交替が可能になると考えられる。

(5) a. {John / The wind / The explosion / The hammer} broke the vase.

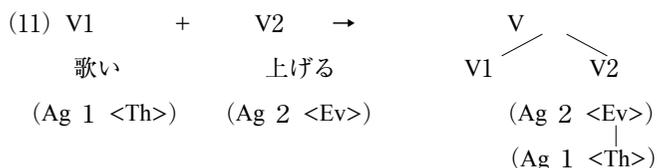
b. The vase broke.

Levin & Rappaport Hovav (1995) の「起因事象の無指定」は起因事象から見ているが、自他交替

(10) セーターを編み上げたのですか。

(○) はい、編みました。(×) はい、上げました。 (作例)

次は補文関係複合動詞の統語的素性を考察する。影山 (1993) や由本 (2005) が指摘しているように、補文関係複合動詞において、V2が Event 項を取り、その Event 項に V1の LCS が埋め込まれている。V1と V2の項の同定は自動的に起こり、主語が同定され、V1の目的語が複合動詞全体の目的語になり、V1の下位範疇化素性が複合動詞に受け継がれる。影山 (1993:109) は「歌い上げる」を例に、補文関係複合動詞の項構造を (11) のように示している。(11) に示されているように、「上げる」は内項として Ev (=Event) を取り、V1の項構造全体がそこに埋め込まれる。



影山 (1993:109)

補文関係複合動詞において、V1の下位範疇化素性は複合動詞全体に受け継がれていることは次の例からも分かる。

(12) a. 他動詞 + 他動詞 → 他動詞

(を) 見逃す、使い果たす、書き漏らす、撫で回す

b. 自動詞 + 自動詞 → 自動詞

(が) 響き渡る、わき返る、降りしきる、行き違う、寝つく、鳴きしきる

c. 非能格自動詞 + 他動詞 → 非能格自動詞

(に / * を) 乗り合わせる、なりきる、働きかける

d. 非対格自動詞 + 他動詞 → 非対格自動詞

(に / * を) 居合わせる、(が / * を) 生まれ合わせる

このように、補文関係複合動詞において、V1は意味的、統語的な中心であることが分かってきた。V1は事象の内容を表しており、どのようなことが起こったかを表している。一方、V2は事象のアスペクトを表しており、当該事象の展開の仕方を表す。これを図1で示す。

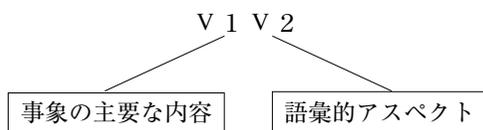


図1：補文関係複合動詞の意味構造

これにより、補文関係複合動詞の LCS は (13) のように表すことができる。V2 は語彙的アスペクトを表しており、V1 の表す事象内容を補助する役割を果たしている。なお、影山 (2013) にしたがって、V2 の表す語彙的アスペクトを [L-Asp] (lexical aspect) と表記する。

$$(13) \text{ LCS} = \begin{matrix} \uparrow & \uparrow \\ \text{[[LCS 1]} & \text{[LCS 2]} \end{matrix} \rightarrow \begin{matrix} \text{[[LCS 1]} & \text{[L-Asp-Z]} \end{matrix}$$

事象内容 語彙的アスペクト

V2 が表すアスペクトには「完了」(例えば、「降り止む」、「編み上げる」「煮詰める」など)、「継続」(降りしきる)、「習慣」(言い習わす、書き習わす)、「強調」(困り果てる、腐りきる) などがある。これらの語彙的アスペクトを [L-Asp] で示すと、(14) のようになる。

$$(14) \text{ 開始} : \text{[[L-Asp INCHOATIVE]} \quad \text{継続} : \text{[[L-Asp CONTINUATIVE]} \\ \text{完了} : \text{[L-Asp COMPLETIVE]} \quad \text{反復} : \text{[L-Asp ITERATIVE]} \dots$$

ここで「編み上げる」を例に、補文関係複合動詞の LCS の表記の仕方を説明する。V1「編む」は「作成動詞」であり、「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っている。その LCS を (15) のように示すことができる。「上げる」は「完了」を表すアスペクトである。V2 の表すアスペクトの情報も含めて、「編み上げる」の LCS を (16) のように示す。

(15) 作成動詞「編む」の LCS:

$$\text{[[x ACT}_{\langle \text{MANNER} \rangle} \text{ ON y]} \text{ CAUSE [z BECOME BE AT-MADE]]}$$

$$(16) \text{ 「編み上げる」の LCS : } \begin{matrix} \text{[[LCS 1]} & \text{[L-Asp-Z]} \\ \uparrow & \swarrow \\ \text{[[x ACT}_{\langle \text{MANNER} \rangle} \text{ on y]} \text{ CAUSE [y BECOME BE AT } \langle \text{MADE} \rangle \text{]]} & \text{[L-Asp COMPLETIVE]} \end{matrix}$$

しかし、補文関係複合動詞の LCS について、もう一つ考える必要があるのは、V2 が V1 のどの事象を焦点化するかということである。というのは、V2 は V1 の事象の一部を焦点化することによって、複合動詞全体の LCS に影響を与えられからである。例えば、「編み上げる」において、「編む」は「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っているが、上述したように、「編み上げる」複合動詞全体は「結果事象」が焦点化されている。これは「上げる」は「編む」の「結果事象」を焦点化することによるものだと考えられる。つまり、V2 は具体的な事象内容を表していないが、V1 の事象を焦点化することによって、複合動詞の意味構造に影響を与えている。これについて、次節で詳しく論じる。

以上議論したように、補文関係複合動詞の意味構造は三つの部分を含むと考えられる。一つは V1 の LCS であり、これは複合動詞の事象の主要な内容を表す。もう一つは V2 のアスペクトを表す部分であり、これは複合動詞の事象の展開の仕方を表す。最後は V2 が V1 のどの事象を焦点化する



3節で少し触れたが、補文関係複合動詞において、V1は事象の内容を表し、V2はV1の何らかの事象を焦点化することにより、V1のLCSに影響を与えている。「編む」は「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っているが、「上げる」は「結果事象」を焦点化することにより、「編み上げる」複合動詞全体では「結果事象」が焦点化される。このため、(21)に示されるように、このような複合動詞は自他交替が可能となる。

- (21) 編み上げる／編み上がる 炊き上げる／炊き上がる
織り上げる／織り上がる 彫り上げる／彫り上がる…

これに対して、(22)のような「～上げる」補文関係複合動詞において、V1「調べる」、「数える」は起因事象しか持っていない活動動詞であり、「上げる」は「作業活動の完了」を表す。そのLCSは(23)のように示すことができる。複合動詞全体は、結果事象ではなく、起因事象が焦点化されているため、自他交替ができない。

- (22) 調べ上げる／*調べ上がる 数え上げる／*数え上がる
(23) 「活動動詞+上げる」LCS:
[[x ACT ON y] [L-Asp Completive]] (活動の完了)

以上、「作成動詞+上げる」複合動詞の自他交替を「結果事象の焦点化」という角度から分析した。以下、引き続き同じ観点からほかの補文関係複合動詞を見てみよう。

4.2 分析例2：「煮詰める／煮詰まる」

「煮詰める」において、「煮る」は作成動詞であり、起因事象と結果事象という複合事象を持っている。「詰める」は「完了」というアスペクトを表している。では、「煮詰める」という複合動詞全体はどのようなLCSを持っているのであろう。ここでも、「詰める」は「煮る」の「結果事象」を焦点化することによって、複合動詞全体は「結果事象」が焦点化される。この点については、「煮込む」と対照してみると明確になる。姫野(1999:72)によると、「煮込む」において、「込む」は「時間をかけてその行為を重ねる」という「累積化」を表している。「煮詰める」と「煮込む」のそれぞれの意味は下記の通りである。

- (24) a. 煮込む：煮汁を多くして時間をかけて煮る。

- b. 煮詰める：水分がなくなるまで煮る。 (『明鏡国語辞典』)

辞書に記載されている意味から分かるように、「煮込む」は時間を掛けて十分に煮るという過程に注目するのに対し、「煮詰める」は水分のなくなるという状態変化の結果に注目している。(25)の例を見てみよう。

- (25) 彼女は1時間ほどリングを煮込んだ／煮詰めた。

「リングを煮込んだ」の場合、ただ時間をかけてリングを煮るということが分かるが、リングがどのような状態になったのかは不明である。これに対して、「リングを煮詰めた」という場合、リングの水分がなくなるという状態になったということが分かる。このことから、「煮詰める」は状態変化の結果が焦点になっていると言える。

3節で、V2がV1のLCSのどの事象を焦点化するかは動詞によって異なると述べた。(24)の2つの複合動詞は以下のように区別して解釈できる。「煮る」のLCSはもともと「起因事象」と「結果事象」の両方を持っているが、「込む」と組み合わせられる場合、「込む」が「起因事象」を焦点化することから、「煮込む」は「煮る」過程に重点を置く表現となる。一方、「詰める」が「結果事象」を焦点化することから、「煮詰める」は変化の結果に注目する表現となる。このように分析すると、「煮込む」と「煮詰める」のLCSをそれぞれ(26a)、(26b)のように示すことができる。

- (26) a. 「煮込む」のLCS:

[[x ACT_{<MANNER>} ON y] CAUSE [z BECOME BE AT-MADE]] [L-Asp Accumulative]
 起因事象を焦点化する
 起因事象 (焦点) 結果事象

- b. 「煮詰める」のLCS:

[[x ACT_{<MANNER>} ON y] CAUSE [z BECOME BE AT-MADE]] [L-Asp Completive]
 結果事象を焦点化する
 起因事象 結果事象 (焦点)

以上で論じたように、「煮詰める」のLCSは、「起因事象」と「結果事象」の両方を含んでおり、また、そこでは結果事象が焦点化されているため、「煮詰める／煮詰まる」の自他交替が成立することが説明される。

4.3 分析例3：「売り切る／売り切れる」

「売り切る」において、V1「売る」は所有変化を表す動詞であり、品物が売り手から離れ、買い手に渡るという意味であり、「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っていると考えら

れる。「切る」は「完了」というアスペクトを表している。

杉村 (2008:72) は接辞的な「～切る」を3つに分類し、基本的に V1が動作動詞の場合は「食べきる」、「走りきる」のように「行為の完遂」を表し、変化動詞の場合は「諦め切る」、「治り切る」のように「変化の達成」を表し、状態動詞の場合は「疲れ切る」、「冷え切る」のように「極限状態」を表すと指摘している。これによると、「売る」の LCS は「起因事象」(行為) と「結果事象」(変化) の両方を持っているので、このような動詞は「切る」と複合化する際、「行為の完遂」と「変化の完遂」の両方を表すことができると思われるが、実際「売り切る」は「変化の完遂」だけを表す。これは「売りぬく」と比べると分かる。「売り切る」と「売りぬく」の意味は次のようである。

(27) 売り切る：品物が全部はけることを意味する

売りぬく：一貫して売り続けることを表している。(姫野1999:173)

(28) 新聞を売り切った。—新聞がなくなった。→変化の完了

新聞を売りぬく。—一貫して売り続ける。→動作の継続

姫野 (1999) によると、「切る」、「ぬく」は両方とも具体的な動作から完遂を意味するようになったものであるが、(27) (28) から分かるように、「売り切る」と「売りぬく」は意味が違う。「売り切る」は「品物が全部はける」という意味であり、重要なのはその品物が売り手から全部離れるという変化の結果である。これに対して、「売りぬく」は品物がどうなるかには無関心であり、「一貫して売り続ける」ことを表している。姫野はこの意味の違いの原因について言及していないが、その原因は「切る」と「ぬく」は「売る」の LCS を構成する異なる事象を焦点化することに求められると考えられる。

「売り切る」において、「切る」は「売る」の結果事象を焦点化し、その変化が達成することを表す。これに対して、「売りぬく」では、「ぬく」は「売る」の起因事象を焦点化し、「売る」行為の継続を表す。それぞれの LCS は次のように示すことができる。

(29) a. 「売り切る」の LCS :

[[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT-SOLD]] [L-asp Completive]]

結果事象を焦点化する

起因事象

結果事象 (焦点)

b. 「売りぬく」の LCS :

[[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT-SOLD]] [L-asp Completive]]

起因事象を焦点化する

起因事象 (焦点)

結果事象

このように、「売り切る」の LCS は、「起因事象」と「結果事象」の両方を持っており、しかも

ここでは「結果事象」が焦点化されている。このため、「売り切る／売り切れる」のように自他交替が可能になる。

ここまで具体例の分析によって、補文関係複合動詞の自他交替について議論した。補文関係複合動詞において、V1は複合動詞全体の意味の中心であり、すなわち、どんな事象が起こったかということを表す。V2はV1の事象のアスペクトを表す。すなわち、当該事態がどの段階にあるのかを表す。以上、本稿では、V1のLCSが「起因事象」と「結果事象」からなる複合事象を持っており、V2がV1の「結果事象」を焦点化する場合は、複合動詞全体では結果事象が焦点化され、その結果、自他交替が可能になることを論じた。

5 おわりに

本稿では、補文関係複合動詞の自他交替現象に関して、これまでとは異なる新しいLCSを提案し、そのLCSの特性に基づいて、単純動詞と同じような「結果事象の焦点化」によって説明した。すなわち、補文関係複合動詞において、V1が事象の内容を表し、V2がアスペクトを表すと同時にV1のLCSを構成する事象の1つを焦点化する。このような状況において、V1が起因事象と結果事象からなる複合事象を持ち、V2がV1の結果事象を焦点化することによって、結果事象が焦点化される場合に自他交替が成立することを主張した。

本稿の分析からも分かるように、補文関係複合動詞において、V2はアスペクトを表し、具体的な事象内容を表していないが、V1のLCSを構成する事象を焦点化することによって、複合動詞のLCSに影響を与えている。しかし、V1が起因事象と結果事象という2つの事象を持つ場合、V2がV1のどの事象を焦点化するのは動詞によって異なる。例えば、4節で「売り切る」、「売りぬく」のLCSを提示した。V1「売る」は起因事象と結果事象の両方を持つが、「売り切る」ではV2「切る」は「売る」の「結果事象」を焦点化する。一方、「売りぬく」では、V2「ぬく」は「売る」の「起因事象」を焦点化する。具体的にどのようなV2がV1のどの事象を焦点化し、複合動詞全体のLCSにどのように影響を及ぼすのかについては更なる考察が必要であるが、それは今後の課題としたい。

注

- 1 本稿は東北大学大学院国際文化研究科に提出した博士論文の一部に加筆修正を行ったものである。
- 2 動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造を語彙概念構造または概念構造という（影山1996:47）。
- 3 単純動詞の場合、「結果事象の焦点化」は「起因事象の無指定」などと論旨はほぼ同じである。しかし、後述するが、複合動詞の場合、起因事象が指定されているものの、結果事象が焦点化されれば、自他交替が可能である。そのため、本稿では起因事象ではなく、結果事象の角度から自他交替を考察する。
- 4 影山（2013）は、補文関係複合動詞をアスペクト複合動詞と呼んでいる。
- 5 これは影山（2013）が用いている判断方法である。しかし、影山（2013）が指摘するように、これはあくまで判断の目安である。

参考文献

- 小野尚之 (2000) 「動詞クラスモデルと自他交替」丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』ひつじ書房 pp. 1-31.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』くろしお出版
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系 - その理論的・応用的意味合い -」『複合動詞研究の最先端 - 謎の解明に向けて』ひつじ書房 pp. 3-46.
- 杉村泰 (2008) 「複合動詞「-切る」の意味について」『言語文化研究叢書』7 .pp63-79. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 陳劫樺 (2010) 「語彙的複合動詞の自他交替と語形成」『日本語文法』10巻1号, pp.37-53. 日本語文法学会
- 早津恵美子 (1995) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて」『動詞の自他』ひつじ書房 pp.179-197.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, pp.37-83. 日本語言語学会
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. MIT Press.

辞書類

- 『明鏡国語辞典』(2002) 大修館書店